

Title	内村鑑三における良心と祈りの問題
Author(s)	岩野, 祐介
Citation	アジア・キリスト教・多元性 (2008), 6: 57-72
Issue Date	2008-03
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/57711">http://dx.doi.org/10.14989/57711</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 内村鑑三における良心と祈りの問題

岩野祐介

### 前置き

内村鑑三のキリスト教思想に対する筆者の基本的な関心は、彼が信仰とは個人のものであるということ強く主張しながらも、同時に社会への働きかけをやめなかったのは何故か、あるいは、社会とそれを構成する人間に対する希望をどこからどのように得ていたのか、という点にある。これまでのところは個人の救いから社会性へと至る連関を、自己と義という観点から考察してきたわけであるが、そこで生じた自己に関する問題に立ちかえり、さらにこの問題を深めることが今回のテーマである。

前述のような主張を内村がなしたこと自体に関しては、当然ながら外的な事情も存在している。信仰とは個人のものであるという主張は、個人の信仰は組織集団のものではない、という当時の既存教派教会に対する批判であると考えることができる。またジャーナリストとしての経験を持ち、自身類稀な文才の持ち主でもある内村が、教派教会に所属しなかったために文書伝道という方法を選んだことは不思議ではない。そして印刷物というメディアのメリットは、容易に多数に同じ内容を伝えられることにあるのであるから、結果として内村は多くの読者を獲得することになるというわけである。しかし、内村がそのような形での伝道を続けたことには積極的な意味があるはずであるし、またキリスト教思想的な裏づけもまたあるはずなのである。

もちろん内村の弟子集団に関してある種の少数精鋭主義が見受けられるのは確かである。それに対して批判的な意味でのエリート主義が指摘されることもある。内村はその文章においては人間一人一人の自由や自立を主張していたのであるから、彼が弟子たちに対して必ずしも寛容とは言えない家父長的とも言えるような厳しさをもって接したことを自己矛盾として指摘することも可能であろう。しかしだからといって、内村が最後まで文書伝道を続けたという事実がなくなるわけではない。また内村が自ら掲げた理想を体現できていないからといって、その理想それ自体もまた検討するに値しないということにはならないであろう。そのキリスト教思想そのものにはいまだ解明されていない点がある。またそれは現代日本におけるキリスト教という問題を考える上でも重要なヒントとなり得るものなのではないだろうか。

内村に関する既に定まった評価としては、彼は義を極めて重んじたキリスト者であるというものがある。そしてそのようなキリスト教理解に対して、キリスト教を総体として正しく理解したものとは言えないのではないか、との批判がなされることもある。たとえば英語圏において最も総合的な内村研究に関する著書のあるハウズは、内村は宗教を求めていたというよりもモラルの典拠を求めていたのではないかと指摘をしている。<sup>(1)</sup> そのような側面が内村にあることは間違いない。実際、幕末から明治にかけての社会的な混乱の中で伝統的な価値観の多くが根底から揺るがされることとなり、多くの若者がキリスト教に新時代の価値観を見出そうとしてキリスト教に入信したのである。しかし内村の内的な動機を辿っていけば、彼の宗教性の根幹を成す救済体験と道徳性の問題とが結びついていたことは明らかであり、内村において宗教的であることと、道徳的・倫理的であること、及びその社会における実践形態としての社会正義を追求することとの間には密接な関連性があるように思われる。よって内村が直接的に愛を強調しないからといって、彼が愛を軽んじていると断定することは難しいのではないだろうか。内村においても、義である、すなわち正しい関係にあることは、他者との間に愛を働かせることであるとされているように思われる。

人間は神の深い愛により、罪人でありながら義とされ、自らの罪から救済されると内村は考える。内村によれば「義とされる」とは、神と正しい関係にあることである。ただし、この神により「義とされる」ことと、その救われた人間の一人一人が義である、すなわち正しい行いをしていくかどうかは内村においては別問題である。義とされるとは神により神との正しい関係へと向き直されることであり、それは一人一人の人間が義であるかどうかとは別の次元で、神の救いが先行する形で為されるからである。

しかし、義とされるのが神と正しい関係にあることであるならば、その義とされた人間同士は社会において、人間同士の関係において、正しくなければならないであろう。よって自分が義であるとは自分が他者と正しい関係にある、ということになるのである。しかし人間同士の関係において、いかなる関係が正しい関係なのか、という問題は、簡単には片付けられない問題である。それは安直な現状追認を招きかねないからである。事実、パウロもその書簡の中で、個人の問題よりも教会全体の安定を優先させたともとれるような言葉を記しているのであり、それは取り様によっては全体が安定するような関係が正しい関係である、とも取りうるものである。よって、神に従うものは、常に自らが他者との関係においても正しくあるかどうか、真摯に反省せねばならないのである。

ここで筆者は「反省」と記した。反省や自己批判とは、自分で自分を判断し批判するということである。しかし、本当に、人間は自分で自分を正しく判断し批判することが可能なのだろうか。自分は一人の、ひとつの自分であるはずである。それがどうして、自分を批判できるのだろうか。自分の目は、鏡を使わないかぎり自分の目を見ることができないのであるし、鏡に映る目は左右が反転しているのであるから、厳密な意味で自分の眼そのものではないのではないだろうか。

(1) John F. Howes, "Japan's Modern Prophet: Uchimura Kanzo 1861-1930", 2005, UBC Press, p.388.

うか。つまり、ここで問題にしたいのは、反省ということが成立するためには、自分だけではなく、他の何かがそこに介在せざるを得ないのではないか、ということなのである。

例えば、キリスト者である内村は、人間関係に関して反省しようとする際に、聖書の記述による正しい人間関係を参照することができる。聖書は物理的にも内村の外側にある、客観的に参照可能な「他」であると考えられる。もちろん先程も「取り様によっては」との書き方をしたように、たとえ聖書であってもそこには解釈の差が生ずる。さらに内村によるならば、聖書を読む上では聖書の言葉を「自分のものに」せねばならないのである。しかし聖書のテキストそのものが大幅に変更することはないのであるから、それを学問的に研究していけば、ある程度信頼できる読み方が得られると考えても問題ないであろう。

ところがそうになると、学問的であること、客観的な読み方を意識させる要素が自分のうちに必要であることになり、これではもとの問題に戻ってしまう。主観的な自分の中にある程度の客観性を保証する要素が何故ありうるのか、ということである。

自分を見つめるもうひとつの自分とは何であるのか。ここではそれを、神とともにある自分である、と考えてみたい。ただしこれは、自分の中に神がある／いる、というのではない。いわば、自分の中における自分の比重を減らして、自分は自分だけで存在するのではなく、神とともに、あるいは神との関係のうちに（そして他の全てとの関係のうちに）存在する、と考えるのである。それが、人間を独断の陥穽から救い出すのではないだろうか。自分の絶対化を防ぐのであるから、自分の相対化と考えてもよいであろう。

また、この、神と共にある自分は、自分を客観視し、反省を可能にする自分なのであるから、いわゆる良心<sup>(2)</sup>であるとも考えることもできるであろう。良心とは、conscienceであるから、共に知るという要素を含むはずである。共にあるということは、独断を回避し、他に開かれることと通じている。新約聖書神学辞典によれば、良心とは「自分自身について証しする機能、すなわち、自分の思いや行動をあるいは責め、あるいは是認する機能」であるから、この解釈は新約聖書における良心の意味としても十分通用するはずである。

(2) なお、良心という漢語は「新字源」によれば孟子によるものであり、この言葉が conscience の訳語として用いられたのは恐らくは漢訳聖書の時点ではないかと推測することが可能である。

儒学に典拠をもつ用語を聖書の訳語として用いることについては問題性を感じる向きもあるであろう。孟子の説く良心は性善説的な思想に基づくものであるから、人間は本性的に良い心をもっているということであって、言い換えれば自然状態の人間の心は良い心であるということになる。確かにこれはキリスト教の人間観における罪人という思想とは若干異なるようにも思われる。孟子も本来は良い素質をもっているながらそれを発揮できるとは限らない（から世の中には悪がある）と考えており、キリスト教でも本来神の似姿である人間が墮罪により罪人に転ずるとするのであるから、両者には共通する視点もあることになる。

そもそも訳語に漢語を当てれば、多かれ少なかれ儒学や仏教のニュアンスを受け継いでしまうのは致し方ないことである。しかし現時点での「神」や「聖」といった語が一般的に受け入れられている際のあり方を考えれば、漢語もまたキリスト教的なもののイメージによりそのニュアンスを変化させられている、とも考えられるのではないだろうか。

内村によるこの良心と祈りの捉え方を、彼の聖書解釈を通して解明するのが、本稿の目標となる。

### 1-1 罪意識と自己意識

まず入口として、内村がいかに罪意識の問題に苦しみ、いかにそこから脱し得たか、ということを確認しておきたい。すなわち、いわゆる「二度目の回心」<sup>(3)</sup>という出来事である。この二度目の回心を通して内村は贖罪信仰を見出したのであり、これは内村のキリスト教体験の中でも最も重要な出来事の一つであると言える。この出来事については様々な場で言及されているのでここで改めて詳述する必要はないかもしれないが、以下にその概要を記しておくこととする。

官吏としての行き詰まり、結婚生活の破綻などを経験した内村は、日本から逃げるように渡米した。当時内村は自らを押し潰すかのような罪悪感に苛まれており、慈善事業に関わることが自らの救済にも繋がると考え、マサチューセッツ州エルウィンの精神薄弱者施設で介護人として働くことになった。慈善とは他の為に自己を棄てることだと考えたからである。しかし、どんなに他人のために働いても、根底に自分が救済されたいという気持ちがあるのだから、それは結局偽善なのではないかと内村は感じ、やはり罪悪感から逃れることはできなかった。

ここで内村が苦しんでいるのは、いわば自分で自分を「偽善者である」即ち「罪人である」と裁いているからである。考えてみれば、自分を責めさいなむものとして自分自身ほど手強いものはないであろう。他人による批判からは、結局のところいくらでも逃げられる。しかし自分は、自分のことを実によく知っているので、自分の嘘を見破ってしまうのである。しかも相手が自分自身なのであるから、どこまで逃げても物理的に逃げることは不可能である。

このようにいわば自分自身によって追い詰められていた内村が自分から解放されるヒントとなったのが、彼を受け入れたアマーフト大総長シーリーの言葉であった。後に内村は、このときのシーリー総長の言葉を以下のように回想している。

「内村、君は君の衷のみを見るから可<sup>いけ</sup>ない。君は君の外を見なければいけない。何故己に省みることを止めて十字架の上に君の罪を贖い給ひしイエスを仰ぎ瞻ないのか。君の為す所は、小児が植木を鉢に植えて其成長を確定<sup>たしか</sup>めんと欲して毎日其根を抜いて見ると同然である。何故に之を神と日光とに委ね奉り、安心して君の成長を待たぬのか。

先生の此忠告に私の靈魂は醒めたのである。…私は修養又は善行に由て救わるゝのでは無い、神の子を信ずるに由て救わるゝのであるとは、セイリー先生がはつきりと私に教へて呉れた事である。」<sup>(4)</sup>

(3) 内村鑑三「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」1918、『内村鑑三全集 24』384 ページ（『内村鑑三全集』1980-84、岩波書店刊。以下『全集』と表記する）等に、内村自身による「二度目の回心」という表現がある。

なお内村の文章にはしばしば各種傍点やゴシック体等により強調がなされている個所があるが、本稿の引用では、それらの強調は再現していない。また、基本的に旧字体をそのまま用いた。

(4) 内村「クリスマス夜話=私の信仰の先生」1925、『全集 29』343 ページ。

シーリーの言葉それ自体は、気楽にせよとのごく一般的なアドバイスであるようにも思われる。従ってはたしてシーリーがそこまで考えていたかどうかは別問題であるかもしれない。しかし内村はシーリーの言葉に導かれて、ただ十字架のイエスを仰ぎ見てその贖罪を信じることにより、自分を追い詰める自分から自分を解放することができたのである。そもそも鑑三という名前自体が、日に三度自らを鑑みる、という意味でつけられたということであるが、「己に省みる」のではなく、内村の外にある十字架のイエスが彼の罪を救うのであり、そしてそのイエスが彼と共にあるのだ、ということになる。

神と共にあるとは、自己に逆らって神につくことを選ぶ、という厳しい立場であるようにも思われる。<sup>(5)</sup>しかし先に見た「神に委ね」て「安心して成長を待つ」というあり方は、自己に逆らう、自己を捨てるといったこととは、事態として少し異なるようにも考えられるのではないであろうか。例えば先程の内村とシーリーの関係であれば、導いたのはシーリーであり、導きによって贖罪信仰に辿りついたのは内村である。内村一人では辿りつけなかったであろうし、彼がシーリーの言うが如くに自分ということにこだわってはいは、これは成らなかったであろう。しかし、辿りついたのはやはり内村自身なのである。

もちろん、反省や良心が不要だということではない。しかし良心あるいは反省的な自己が、神と共にあるものでなければ、それは自己を容赦なく苛む恐ろしいものになってしまう。つまり良心・反省的な自己そのもののあり方が、果たして健全なものであるかどうかを問われねばならないのである。そしてそれを為すためには、その際に全てを自分で引き受けようなどとせず、神に委ね神と共にあること、祈ること、が重要になってくるのである。ここに、良心にもとづいて自らに反省を加え、その実現を神に祈る、という連関が生ずるわけである。以下、この良心と祈りという問題について内村の文章を具体的に検討しつつ考察を進めていくことにする。

## 1-2 自己の問題と祈り

シーリーが内村に教えたイエスを仰ぎ見るということは、文字通り仰ぎ見るという意味ではなく、イエスを信じて祈るということであると考えられる。この祈るということは神に話しかけるという点で対話的である。そして他者との対話においては、自己を絶対化せず、相対的なものとしなければならない。そうでなければ対話ということは成り立たないであろう。ところが祈りにおいては、対象としての神を直接的に視覚や聴覚、触覚等で把握することができない。そのため祈りは、実質的には自己との対話に近い形で行われることとなる。但しこれが自分一人だけによる自己批判と異なっている点は、その判断を外にある神に委ねる、あるいは神との共同作業としてそれを行う、という点になるのではないかと考えられる。

これは何も筆者の思い込みではなく、内村にはこのような内容を示唆する言葉が実際にあるのである。例えば以下のようなものである。

---

(5) 例えば李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想—贖罪論と終末論を中心として—』(九州大学出版会、2003)、178 ページでは、「神と供にある」ことを「自己に逆らって神につく」と解釈している。

「私は自分自身で祈りません。私は神様に私に代つて祈つて戴きます。霊なる神様が私の衷に宿り給ひて、私を通して神様の聖意を祈り求むる事、時には言ひ難き慨嘆を以て、それが本当の祈りであります。」<sup>(6)</sup>

「自己を無きものとする事は祈願を以て神に言ふ時にすら必要であります。私共は神様に神様が私共に代つて祈つて下さるように祈らなければなりません。」<sup>(7)</sup>

「祈禱は此の事彼の事を神に祈願ふことにあらず、そは汝等の天の父は祈求はざる先に汝等の必需品を知り給へりとあれば也（馬太六の八）、祈禱は自己を祈禱の態度に置く事なり、神を我が心中の第一位に置き、自己は単に恩恵の受器となりて其祝福を仰ぐことなり、祈禱は人たる者が其の造主なる神に対して取るべき当然の態度なり、此態度に在りて彼の肉体は健全ならざる得ず、彼の思想は明瞭ならざるを得ず、彼の行為は勇敢ならざるを得ず、彼の靈魂は高明ならざるを得ず、…祈禱は信者が神に対して取る服従の態度なり、待命の態度なり、容受の態度なり、…」<sup>(8)</sup>

確かにここでも内村は自己を無きものと言っている。しかし、自分の努力によりそのようにするという事は困難である。ゆえにそうなるように神に祈るのである。この際にもっとも反省され無きものとされるべきことは自己中心性であつて自己そのものではないであろう。というのは、自己には「恩恵の受器」としての意味があるからである。そしてこの受器としての自己には、もっと積極的な意味が見出されてしかるべきではないか。それは次のような言葉からも見てとることができる。

「我等が精神を罩めて祈つた祈禱にして聴かれざる者が尠くない。此は抑々如何なる訳である乎。」<sup>(9)</sup>

「○勿論或る祈禱の聴かれないのは聴かれない方が善いからであるに相違ない。…「汝ら信じて祈らば求ふ所尽く得べし」と云ふのであれば、信仰が聴かるゝ条件であるは明かである。乍然信仰の量でなくして其質である事を我等は充分に知らねばならぬ。」<sup>(10)</sup>

「○然らば純なる信仰とは如何なる信仰である乎と云ふに、私心なき信仰を云ふに相違ない。…我等の祈禱の聴かれざるは…即ち直接に間接に己の為に求むるからである。」<sup>(11)</sup>

「○そして私の経験に於て私が私に利害関係のない事の為に祈つた祈禱は大抵聴かれてある。」<sup>(12)</sup>

(6) 内村「PRAYER. 祈禱に就いて」1923、『全集 28』69 ページ。

(7) 同前、70 ページ。

(8) 内村「祈禱」1911、『全集 18』319 ページ。

(9) 内村「祈禱の効力」1927、『全集 30』487 ページ。

(10) 同前、488 ページ。

(11) 同前、489 ページ。

(12) 同前。

「○茲に於てか他人に私の為に祈つて貰ふ必要を切実に感ずる。…私に神の恩恵の絶えざるは斯かる人達が私に知らせずして幾年も継けて私の為に祈つて呉れたからであると信ずる。自分に利害関係のなき人の為に彼の永遠の幸福を祈るべきである。是れが人が人の為に為し得る最大の奉仕である。」<sup>(13)</sup>

このように内村による自己中心性の批判は、自らを正しくあるよう仕向けるだけでなく、他者と正しい関係性を築くことへと繋がるものである。そして自分に反省を加え、神に頼るように仕向けるのが、内村の立場からは良心である、ということになるのである。

### 1-3 一般的な良心とキリスト教的な良心

良心という言葉それ自体は、キリスト教思想においてのみ用いられる言葉であるわけではない。よって、内村が良心という語を用いる時に、キリスト教的な意味ではなくより一般的な意味で用いているのではないか、という問題が生じかねない。しかしこれについては、次のような内村の文章を参照することができる。

「…良心がなくして如何なる国も立たないのである。良心がなくして共和政治は愚かのこと、如何なる政治も行はれないのである。良心がなくして国は既に亡びたのである。」<sup>(14)</sup>

「○良心は如何にせば之を維持するを得る乎、萎靡せる良心は如何にせば之を復活するを得る乎 忠孝道德が良心を活かすことの出来ないことは支那其者が最も宜き証明者である、其理由は明白である、道德は人の道であつて良心は神の生命であるからである、神が人に命じ人が神に応ふる所に良心があるのである、良心は人の神覚である、人を離れて人が独り神と相対して立つ時に良心があるのである、神が見えずなり人が自己と社会とのみ相対するに至る時に良心は失するのである、社会道德と称して神抜き道德が唱へらるゝ所に良心は萎靡して誠実は減退し終に良心其物までが消滅するに至るのである。」<sup>(15)</sup>

このような内村の言葉から、彼が社会において一般的に必要なと考えられているような良心は、その根底にキリスト教的な良心がなければ成立しないと考えていることを見て取ることができるであろう。内村がこのように考えるのは、端的には、人間が弱い罪人だと彼が考えるからであろう。ゆえに人間には限界があり、また安きに流れる性質があるのである。しかし内村は、良心において罪を責める厳密さだけを追い求めるのではないように思われる。先の引用文に続けて、内村は以下のように述べている。

(13) 同前、490 ページ。

(14) 内村「良心の無き国民」1916、『全集 22』465 ページ。

(15) 同前、465-466 ページ。



「(引用者注：福音伝道は) 実に国家の興亡に関わる重大問題である、其故如何にとなればキリストの福音のみが健全にして鋭敏なる良心を国民に供するからである、…」<sup>(16)</sup>

彼は、自らの体験を通して、ひたすらに鋭敏な良心が時に人間をどうにもならない状態まで追い詰めることを知っていたため、健全にして鋭敏と述べたのではないであろうか。

以上より、内村が一般的な良心を支えるものとしてキリスト教信仰が必要であると考えていることが明らかになった。そこでキリスト教的な意味での良心という語の理解を確認するため、聖書解釈に関するテキストを素材に検討を進めたい。具体的には第1コリント書での良心に関する記述を内村がいかにかに解釈しているか、彼の聖書解釈テキストを見てみることにする。パウロ書簡を用いるのは、彼が新約聖書著者の中で最も良心という言葉をよく使っている人物だからである。<sup>(17)</sup>

## 2-1 第1コリント解釈による良心

ここまで見てきたかぎりでは、良心とは主に自分に罪があるかどうか、を裁くものであった。パウロにおいてもその点に違いはない。しかしパウロ書簡を検討していけば、この主として自分の問題であった良心の問題が人間相互の関係においても大きな意味を持つてくることが明らかになってくるのである。

パウロ書簡において、良心の問題がもっとも多く取り上げられるのは、第1コリント8章以下の部分である。<sup>(18)</sup> そこでまずはこの部分に関する内村の解釈から検討をはじめよう。使用するテキストは1916年の「如何にして偶像に対すべき乎」である。ここで解釈されるのは、第1コリント8章、及び10章23節以下の部分である。

内村はまずここで問題とされているのは「偶像即ち真の神ならぬ神に如何にして対すべき乎」<sup>(19)</sup> ということである、とまとめる。はたして、「唯一の神に仕ふる基督者が偶像に献げし者を食ふべき乎否乎」<sup>(20)</sup>。内村の解釈は以下の通りである。

「唯一の神の外に神あるなし、偶像とは世に無き者である、其事は疑ふべくもあらざる真理である、」<sup>(21)</sup>

(16) 同前、466 ページ。

(17) 『新約聖書神学辞典』、1991、教文館、557 ページ。

(18) 聖書大辞典「良心」の項目を参照。

(19) 内村「如何にして偶像に対すべきか」1916、『全集22』、407 ページ。

(20) 同前、408 ページ。

(21) 同前、409 ページ。

「然し乍ら世には尚信仰弱き者がある、偶像を無とする能はず、人の之に献げし物を食するを見て其弱き信仰躓かんとする人がある、…果して然らば自己の知識のみに従て自由なる行動を為すが為に彼等弱き者を躓かしむるは之れ神を愛せず兄弟を愛せざる者ではない乎。」<sup>(22)</sup>

「偶像に献げし物を食する事必ずしも罪ではない、弱き兄弟を躓かしむる事之れ大なる罪である、」<sup>(23)</sup>

以上が8章4節～12節に対する内村の解釈である。このように内村は、これは基本的には各個人の問題であり、それは各自で判断すべきことであるとす。しかし、すべての人間が自分の知識と自由により判断し行為できるほど強くはない。かくして、良心の問題、それが罪であるかどうかという問題は、それが他者（特に同じ宗教を共有する同胞）との関係の上でどうか、という問題となることになる。内村自身の体験からも明らかであるように、良心というものは時に人を縛り付けるものである。しかしそこから解放されるためには、その人自身が解放されなければならない。それが、信仰は個人のものだ、ということである。しかし、内村にとってシーリーの言葉がヒントとなったように、解放へと導くきっかけは外側から与えられなければならない。よって自分の傍らに良心の問題・やましきの問題に苦しむ者、ここでパウロが言うところの弱いものがある場合、我々はよいヒントとなるようにふるまわなければならないであろう。そうなると信仰は単に個人の問題にはとどまらないことになるのである。内村は続けて13節に関して、以下のように述べる。

「…我等基督者として律法的に事を定むる事は出来ない、偷盗姦淫等純道徳の問題は別として所謂 indifferent questions（絶対的には善悪を言ひ難き問題）と称せらるゝもの、例へば飲酒、喫煙、観劇等に至ては之を禁止すれば事は即ち済むかも知れないが然し之は救はれたる者の態度ではない、」<sup>(24)</sup>

「彼（引用者注：パウロを指す）は言うたのである、「規則ではない、知識でもない、愛である、一人の弱き兄弟を躓かしむる事なき乎、問題はそれに由て定まるのである」と。」<sup>(25)</sup>

こうして、自分にとってやましきを感じるかどうかだけが問題なのではなく、人間は相互にそれぞれ良心を尊重しあうべきなのである、との結論が10章24節以下の解釈を通して導き出される。ただし注意が必要なのは、尊重しあうと言ってもそれが自分の良心に基づいて他人の行動を判断する、すなわち他人を裁く、ということが認められるわけではないということである。他人の良心に照らして自分が正しくあろうとするのであって、自分の良心に照らして他人を正しくあ

(22) 同前、410 ページ。

(23) 同前。

(24) 同前、410-411 ページ。

(25) 同前、411 ページ。

るように強いるのでは決してない。

「他人の益を求むる、之れ基督者の生涯である、彼は之によりて己を縛るのである、…人の母となりたる者は子の為に自ら自己を縛る事の如何に多きかを実験する、基督者は恰もそれと同じである、母が万事を子の立場より見るが如く基督者は何事をも神と兄弟との立場より考ふるのである、是に於て絶対の自由は絶対の束縛となるのである、…」<sup>(26)</sup>

「…パウロに取ては自由とは自己の為のものではなかつた、…他人に献ぐる為の我自由であつた、キリストを信ずる者は律法より離れて全き自由を獲得したのである、然しながら此自由を用ふるが為に他人の良心により是非せらるゝ事あらん乎、…我自由は之を他人の良心に讚美せらるゝが如くに用ふべきであれ、却て何人かの良心の躓となり其蹶りを招くに於ては寧ろかゝる機会を与へざるに如かない、…」<sup>(27)</sup>

以上の言葉から、内村が良心の問題を自分の問題としてとどめておくのではなく、他者との関係の問題として、しかも、他者の益になることを求めるのであるから、隣人愛と関わる問題として捉えていることが明らかとなる。これは祈りの問題において確認したこととも重なるのである。

### 3-1 内村における祈り

続いては良心により明らかになる問題を神と共に克服するための方法としての祈りが、内村においてどのように捉えられているか、という問題に移ることにする。

まず先に挙げた、祈るのは内村ではなく神である、あるいは内村一人でなく神と共に祈る、ということについて、もう少し詳しく内村の文章に沿って確認してみたい。

内村のこのような考え方は、その根源をキリスト教思想の伝統へと求められよう。そもそもキリスト教においては、キリストによるとりなしという考え方があるからである。この、まことの神にしてまことの人であるキリストが、人間と神を繋ぐということと、信仰によって生まれ変わった人間のうちにはキリストが生きている（生きているのは私ではなくキリストである）というパウロの思想とが、内村によるこのような考え方の背景にあるものではないかと考えられる。

内村も当然のことながら、キリストが祈りを仲介する、と考えている。

「汝等のすべて我名に託りて父に求ふ所のものを彼をして汝等に賜はらせんがために我れ汝等を立てたり。(約翰伝十五章十六節)。

キリストが我等の祈禱を取次ぎ給ふと云ふは単に之を聖父に伝達し給ふと云ふ事でない、之を御自身の祈禱として聖父に捧げ給ふと云ふ事である、…斯くて我等の弱き祈禱はキリストの聖名に由りて捧げられしが故に強くせられ、強く聖父の慈仁に懇へ、強き応答を彼より

(26) 同前、411-412 ページ。

(27) 同前、413-414 ページ。

惹くのである、恰かも発信局の弱き電流が中継局の強き電流に増大せられ、強き電流として受信局に達し、而して之に応ずる強き返電が再び発信局に達するが如しである…」<sup>(28)</sup>

電流の比喩からは、我々が元々持っているものをキリストが増幅するのか、との印象をうけるかもしれない。中継局は電流を増幅するのみで、発生させるわけではない。故に、祈りそのものはやはり一人一人の人間から発せられねばならない。しかしキリストはそれを「御自身の祈祷」とする。ではその仲介はいかなるものであろうか。

「我が呼びまつる者は天地万物の造主なる真の神に非ず、我が救者なる人なるイエスなり、我と情を同うし、我が苦痛を味ひ給へる我が共にして又我が主なるイエスなり、…我は我が救主に祈るに方て天の高きに向けて叫ぶに非ず、我が側に座し、我に同情を寄せ給ふ我主に対して語るなり、我は「主イエスよ」と呼びまつりて我が祈祷の空を打つが如くにあらずして或る確実なる目的物に向て発せらるゝを知る也。」<sup>(29)</sup>

このような言葉から、キリストによる仲介というものが単に右から左へと情報を伝達するだけのメッセンジャーのようなものではなく、愛情と配慮、そして共苦の心を持って人間の為にとりなしてくれるようなものであると内村が考えていることを見てとることができるであろう。この、我々が祈るのではなく、我々の為に神が／キリストが祈る、という構造は、先に見た「他人の為に祈る」という構造と極めて似ていると指摘できる。

このように神やキリストをいかにも存在しているものであるかのように考える内村の思想に対しては、現代的な視点からの批判も可能であると思われる。あるいは、内村の神観はあまりにも人間的であると言えるかもしれない。しかし神という我々の外にある存在を考えることにより、内村が自分・自己中心の問題から脱し得ていることは確かであり、さらにそこには他の人間との間の関係性が開かれているということは間違いないだろう。

この構造は、内村における愛の問題におけるそれとも共通するものである。内村は神に愛されることにより敵までも含む他者を愛することができるようになると思う。人間と人間との関係に神が媒介することにより、人間どうしのよりよい繋がりが生ずるとの発想である。また義をめぐる問題でも同じような構造が見られる。神に義とされる、すなわち神と正しい関係をもつように神の方へと向きなおされる人間は、それにより他の人間とも正しい関係もつようにならなければならないのである。また神に対する信仰により個人が変えられ、それによって社会全体が変わっていくという内村の「社会改良」思想も同様の構造を内包しているのではないであろうか。

ここで「恩恵の受器」としての自己の意味を改めて考えてみたい。恩恵の受器があるからこそ

(28) 内村「祈祷の執成」1916、全集 22、165-166 ページ。

(29) 内村「祈祷の目的物」1911、全集 18、260 ページ。

恩恵を受けられるのである。そして恩恵を受けるからこそ、神に深い感謝を抱くのである。この神に対する感謝は、それによって他の人間を愛し、あるいは他の人間と正しい関係を築くことへと繋がる。つまり自己のもつ受動的、あるいは感受的な力が、神を媒介して間接的に他者との繋がりを生じさせているとも言えるであろう。

さらに、先に確認したような祈禱に関する見解を通してこのことを考えなおすと、もう一つの要素を見出すことができるように思われる。先に引用した文章の中で内村は、自分は他人のために祈り、他人が自分のために祈る、と述べている。ここでの祈りには、個人の救いについて相互に祈りあうことも当然含まれるであろう。振りかえってみれば、シーリーによる助言の背景にも、内村が救われるようイエスを通してシーリーが祈る、という事態があったのではないかと想定できる。つまり、内村が神と人間の関係の土台におく個人の信仰、人間が神の前に一対一で立つといった信仰のあり方は、同時にその背後に多くの人間たちによるその個人のための祈りがある、という事態を否定するものではないのである。人間が神に面する際に、他の誰かが特権的な司祭的存在として介在することは否定されるが、その人間を後からささえる他者が否定されるわけではない。そして罪人であり神の前では全く無力である一人一人の人間が神に対面するなどということは、その支えとして他の人間たちの祈りがなければ到底あり得ないとも考えられるのではない。

このような祈りは、内村にとって、義務感や道徳観念によってなされるものではなく、ある種の喜びを含むものであった。それは以下のような引用文から読み取ることができる。

「祈禱は義務ではない 快樂である、神と交際する事である、父と語る事である、我が凡の祈求を以て彼に近づく事である、之に優るの快樂の他にありやう筈はない、而して他者の為に祈るは自己の為に祈るよりも楽しくある、先づ第一に神の為に祈る、…次に友人の為に祈る、全国並びに全世界に散在する我が教友の為に祈る、…其次ぎに世界万民の為に祈る、…而して最後に我敵の為に祈る、…祈禱の快樂は自己の利益より離るゝ丈け其れ丈け大なるを覚ゆ、祈禱に快樂を覚えざるは自己の利益をのみ維れ神に訴ふるに因る、神の心を以てするにあらざれば喜んで神と交際することは能ない、神は愛である、其愛を以て彼に近づく時に祈禱は最大の快樂たらざるを得ない。」<sup>(30)</sup>

(30) 内村「祈禱の快樂」1917、全集 23、169 ページ。

### 3-2 主の祈りとその解釈

続いて、聖書における祈りについて内村がどのように解釈しているか、という問題を、主の祈りに関する内村の文章を題材に確認してみることとしよう。主の祈りを題材とするのは、それが新約聖書において示された祈りのモデルであるからである。

内村は1919年「主の祈禱と其解釈」において主の祈りに対する解釈を表している。この文章は主の祈りだけでなく、マタイ伝6:5-13の註釈となっている。内村はまず、この箇所は「祈禱は如何なる態度と如何なる言語とを以て為すべき乎」を教える箇所であるとして、それぞれについて述べる。なお態度の問題は、ここでは場所の問題として扱われる。

「第一、如何なる場所にて祈るべき乎、「汝祈る時は厳密なる室に入り戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ」、祈禱は父との秘密の会話である 故に人の見えざる所にて祈るべきである、然らばとて勿論共同の祈禱を怠るのではない、共に為す祈禱あり又各自厳密なるところにて為す祈禱あり、而して交際の最も親密なるものは人の見えざる所にての交際なるが如く祈禱の最も深きものも亦隠れたる所に在ての祈禱である、…」<sup>(31)</sup>

続いて言語の問題である。

「次に如何なる言語を以て祈るべき乎、「汝等祈る時は異邦人の如く重複語を言ふ勿れ」、…基督者の祈禱は意味深長にして言語簡潔なるを貴ぶ、徒らに重複語を發するは父の喜び給はざる所である、斯く言へばとて必ずしも長き祈を斥くるのではない、…無意味なる語の反覆を誠むるのである、短くして強き語を以て我等は神に近づくべきである。」<sup>(32)</sup>

以上に続いて、内村は主の祈りの解釈へと進む。曰く、「最後に如何なる状態に於て祈る可き乎、此問に対して教へられしものが即ち「主の祈禱」である」。<sup>(33)</sup> 内村によれば呼びかけと総括を除けば、それらに挟まれた主の祈りの句数は7であり、これは「聖書に於て三は天に係る数、四は地に係る数にして七は完全を表はす数」<sup>(34)</sup> であるとされる。すなわち、「七句より成る主の祈禱中天又は神に係るもの三、地又は我等の肉と靈に係るもの四、前半は天的にして後半は地的」<sup>(35)</sup> である、ということになる。そしてこの、「神に関する祈は先にして我等に関する祈は後である」<sup>(36)</sup> いうことを、主の祈りについて学ぶ上でまず知らねばならないと内村は言う。

(31) 内村「主の祈禱と其解釈」1919年、『全集25』、110ページ。

(32) 同前、112ページ。

(33) 同前。

(34) 同前、113ページ。

(35) 同前。

(36) 同前。

続いて内村はそれぞれの句に関する解釈を行う。第一の祈祷は「願はくは聖名を崇めさせ給へ」である。これは「我等の祈の第一の題目は神でなければならない」ということであり、自分について祈るのではなく、「神の聖名の万民に崇められん事、之れ基督者の祈禱の第一条たるべき」<sup>(37)</sup>であると内村は述べる。次に「聖国を臨ませ給へ」について内村は、「神の国が此地上に來臨せん事」「天が地に來りて此所に實現せん事」と解釈し、「一国又は一社会のための祈ではない、全地球全人類に関する祈である」<sup>(38)</sup>とする。そして「天に係る」部分の終りとしての「聖旨の天に成る如く地にも成させ給へ」について、「神の国の地上に來臨するのみならず、次に其感化が各自に及び神の心意が各自の心意となり各自が実に神の子とならん事を祈る」<sup>(39)</sup>のであると述べる。「国」の支配の問題にとどまらない、各個人の心の問題であると言うのである。「<sup>たとへ</sup>仮令キリスト來りて完全なる政治を行ひ社会の罪惡を悉く除き給ふとも各自が神の心を以て己の心とするに非らざれば其恩恵に与る事が出来ない、故に地に降りし神が更に各自に入り込み之を全く占領し給へと祈るのである」。<sup>(40)</sup>

後半に移る前に、以上の部分を通して自己の問題を確認しておこう。まず神が先で地のことが後とされる天で、キリスト教の中心が人間ではなく神であるということが示される。これは自己中心性の否定である。しかし「各自が神の心を以て己の心とする」というのであるから、各自の自己が全く否定されるというわけではない。「占領」という事態は、占領すべきものがあるからこそ起こり得るのである。先に見た受器と同様の意味がここでも確認できると言えるであろう。

続いては後半の、人間についての祈祷に関する箇所である。「我らの日用の糧を今日も与え給へ」について内村は、「生計問題決して神の顧み給はざる所ではない」<sup>(41)</sup>とするが、しかし「今日」なのであって、明日や明後日、子々孫々に至るまでの財産をねだるようなことはしてはいけないと述べる。

次の「我等に負債ある者を我等が赦す如く、我等の負債をも赦し給へ」について、これは罪の問題なのであり、「神に罪を赦されんが為には自ら先づ我が敵を赦さなければならない」<sup>(42)</sup>と内村は説明する。これは過去の罪の問題であり、一方続く「我等を試探に遇せ給ふ勿れ」は「我等の前に当りて我等を罪に陥れんとする幾多の試探」<sup>(43)</sup>に対するものである。「惡より救ひ出し給へ」は、「試探」に遇ってしまった場合の祈りであり、或は「前の祈と同じ種類」とも考えられる、と内村は解釈するのである。従って後半の人間についての祈祷句は、人間の外的な生活と内的な罪に関して神に頼るものであると考えることができるであろう。

---

(37) 同前。

(38) 同前。

(39) 同前。

(40) 同前。

(41) 同前、114 ページ。

(42) 同前。

(43) 同前、115 ページ。

以上のように主の祈りについて解釈を行った内村は、これを以下のようにまとめている。

「…ベンゲル曰く祈祷とは地にある人が天にある神に縋り付き以て神を天より地に伴ひ来る事であると、実にさうである、而して祈祷中の祈祷は「主の祈祷」である、…主の祈祷は常にキリストの精神であつて又使徒等の精神であつた、…故に主の祈祷の各句を基礎として其上に基督教の大体系を建設する事が出来る。」<sup>(44)</sup>

さらに内村は注意を要することとして、自己中心性の問題を挙げる。

「注意すべきは普通の祈の中に数多くして主の祈祷の中一も見当たらざる語ある事である、何である乎、曰く「我」である、…」<sup>(45)</sup>

内村はこの問題を、道徳的な問題としては捉えない。そうではなく人間の救済と深く結びついたことと考えて次のように説明している。

「…之れ必ずしも自己の為の祈を禁じ給うたのではない、聖書の中にも「神よ罪人なる我を憐み給へ」との祈がある、然しながら普通の場合に於て祈は会衆の全体に亘らなければならない、家庭に於て全家族が恵まるゝに非ざれば我は恵まれないのである、集會に於ても亦然り、全員共に恩恵に与らん事を願ふ、…」<sup>(46)</sup>

このように、全員が恩恵を受け救われると考えることで自分も安心して救われることができると内村は考えるのである。人間の救済とは、一人一人の人間が確かに自分は救済されたと安心し、満足できるものでなければならず、それは当人以外の他の人間がこの人は救われた、救われない、等と判断できるようなものではない。その意味で救済は個人の問題であり、宗教は個人的なものである。しかし、その一人一人が救済される過程で、同じ集會にいる兄弟同胞の救いから、あるいは敵の赦しまで、様々な他の人間との係りが問題となる、ということになる。

---

(44) 同前、122 ページ。

(45) 同前、116 ページ。

(46) 同前。



### まとめに代えて 祈りと愛

確かに愛には、他のためにはたらくことを自らの喜びとして感じる機能がある。そこには自己中心性とはまた違った意味で自己を満たすものがあるのではないだろうか。内村はそのことを、祈りとは喜びであるといった言葉を通して表現しているように思われる。

内村における愛という概念は問題性を含んだ扱いの難しいものである。少なくとも、内村が愛のみを強調することが危険なことであると考えていたことは考慮しておかねばならないだろう。内村は人間の愛と神の愛を区別し、さらに人間の愛の中でも恋愛に対しては警戒心を抱いているが、これは「自由な」恋愛が家庭（内村によればそれはキリスト教的社会の根底をなすユニットである）を破壊しかねないものだからである。内村が近代人の恋愛を、対象を自己の延長として愛するようなエゴイズム的なものであると見ぬいていたことについて見落としてはならない。内村にとって、自己中心性の問題を棚上げしたまま愛を強調することは危険であったのである。

愛ということは内村に限らずそれ自体注意が必要な問題である。この問題について述べるのであれば、より包括的な明治から大正にかけての「愛」という概念がいかに受容されたか、という視点が必要であると考えられるが、それは今後の課題としたい。ここでは、不敬事件や非戦論等の印象もあって一般的に我が道を行く強い思想だと思われている内村のキリスト教思想に、他者の良心から見てどうであるか、といった側面があったことを改めて指摘するにとどめておきたい。

独立伝道者となって以降の内村が、愛のはたらきについて本稿で確認してきたような理解もち、キリスト教のみならず宗教全般においても重要な要素であると考えられる祈りと結び付けた思想を展開していることを見るかぎりにおいては、内村鑑三は愛より義を重んじた思想家であると単純に結論付けるわけにはいかないように思われる。万能なる神の無限な愛が全てを許す、ということが人間の思いあがりへと結びつかぬよう、内村もまた様々な思考をめぐらせていたのであり、相互に祈り合うことで助け合うということもまたその一環なのではないかと筆者には思われるのである。

(いわたの・ゆうすけ 神戸松蔭女子学院大学非常勤講師)